「経済学」「経営学」はこう学べ。

「経済学—何を、どう学ぶのか？」

何を学ぶのか

経済学とは、言うまでもなく、「経済」すなわち社会生活を営むための財やサービスの生産・売買・消費などの活動のあり方を研究する学問です。私たちの住んでいる日本を含めて多くの国では、個別の経済主体（生産者や消費者）が財・サービスの生産・消費をその市場価格に基づいて自由に決定し売買を行う「分権的市場経済」をベースにしながらも、政府による市場への介入が行われています。このような経済のシステムを「混合経済体制」と呼びます。したがって、私たちの住んでいる社会における経済のあり方を理解するためには、市場経済の仕組みと政府の経済活動に対する理解を深める必要があります。

経済のあり方を研究するといっても、現実の経済は極めて複雑です。そこで、経済学では複雑な現実経済を単純化し、抽象的なモデル（模型）を用いた分析がしばしば行われます。このような経済のモデル分析の方法には、演繹的あるいは帰納的な推論に基づく理論的なアプローチと、統計的手法に基づく計量的なアプローチとがあります。また、経済学の分析の視点には、市場経済における個別の経済主体の消費や生産に関する意思決定とそれが社会的にどのような状態をもたらすかに着目する「ミクロ的」な視点と、経済全体に関係する諸変数（インフレ率、失業率、GDP等）の間の関係やその動きに着目する「マクロ的」な視点とがあります。さらに、経済学はその研究対象に応じて、開発経済学、金融論、環境経済学、公共経済学、国際経済学、財政学、産業組織論、都市経済学、労働経済学などに細分されます（もう少し詳しく知りたい人のために、小塩隆士『高校生のための経済学入門』（ちくま新書）と日本経済新聞社編『やさしい経済学』（日経ビジネス人文庫）を挙げておきます）。

基礎理論を学ぶことの重要性

経済学には、さまざまなアプローチや研究分野がありますが、その理解のためには、基礎理論をしっかりとマスターしておくことが必要であることは言うまでもありません。経済学の分析視点にはミクロ的な視点とマクロ的な視点とがあるということは既に述べましたが、それぞれに対応する基礎理論は通常「ミクロ経済学」「マクロ経済学」と呼ばれます。ミクロ経済学とマクロ経済学は互いに補完しあう関係にあり、両者をバランスよく理解しておくことが望まれます。

経済学の基礎理論は公務員、公認会計士、証券アナリストなどの就職・資格試験でも試験科目となっており、経済学をマスターすることによって、これらの職業への就職の道が開かれることにもなります。しかも、経済学部に入学した皆さんは、こうした重要な学問としての経済学を基礎のみならず様々な応用分野にわたって専門的に学ぶことができるわけですから、本当に幸せなのです。

どう学ぶのか？

経済学を勉強する人がつまずく二大要素として、難しい専門用語がたくさん出てくることと、数学の使用が挙げられます。

最初に述べたように、経済学では現実の経済を単純化・抽象化することによって理解を深める学問ですから、これらの二大要素は、実は論理的に明快に分析することを可能にする二大メリットでもあります。重要なのはむしろ、「その用語が何を意味するのか」、「なぜそのような計算をするのか」、「得られた結果をどのように解釈するのか」といったことであり、専門用語と数学はあくまでもそのための道具だと思ってください。どんな道具も、初めのうちはなかなか上手に使いこなせませんが、慣れてくれば道具を使っていることすら忘れてしまうものです。

なお、数学といっても、経済学の基礎理論で出てくるのは、関数とグラフ、方程式の解き方、微積分の初歩といった、高校までの数学の範囲で十分対応できるものばかりです。「ちょっと心配だな」と思う人は、高校のときの数学の教科書を見直す（捨ててしまった人のために、柳谷晃『忘れてしまった高校の数学を復習する本』中経出版を挙げておきます）などして、確実に身に付けておきましょう。

経済学の基礎理論が学べる講義科目として、本学では「経済原論」「基礎ミクロ経済学」「基礎マクロ経済学」といった科目が用意されています。まずはきちんとこれらの講義に出席し、真剣に講義を聴きましょう。講義を聴いて分からないことがあれば、友人や先生に積極的に質問し、理解を確実なものにしていきましょう。そして、ノートを見直す、教科書や参考書を読む、自分で練習問題を解くなど、復習を必ず心がけましょう。特に、問題演習は、講義で説明された経済学の考え方を使って自分の頭で考えることになるので、何よりも有益な学習法です。

私が学生のとき、ミクロ経済学の先生に「90分（一時間半）の講義を受けたら、少なくとも三時間をその講義内容の復習に費やしなさい」と言われました。大変かもしれませんが、私自身の経験から言っても、そのくらい勉強しないと身に付かないのは事実だと思います。大学の講義は週一～二回ですから、講義を聴きっぱなしでは、当然のことながら後に何も残らないからです（このことは経済学に限らず、どの学問でもあてはまるのではないでしょうか）。

これから経済学を学ぼうとする皆さんには憂鬱な話が続きましたが、学問の習得は、何だって最初は大変なもの。でも、知識の蓄積が進むと、加速度的に理解が進みます。これを「学習効果」といいますが、ここからがとても楽しいのです。皆さんもぜひこの楽しさを味わってほしいと思います。

AKIHIKO YANASE

柳瀬明彦

経済学部講師。
1971年横浜生まれ。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士（経済学）。東北大学大学院経済学研究科助手、名古屋商科大学総合経営学部講師を経て、2003年4月から高崎経済大学経済学部講師。担当講義科目は基礎ミクロ経済学。専門は国際経済学、環境経済学、公共経済学。
〔URL〕http://www1.tcue.ac.jp/home1/yanase/